
n as the twelve zodiacal signs -- persons' battle

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方十二転生 (the transmigrational
hostenasthetwelvezodiacals
igns — persons' battle

【Nコード】

N0778BA

【作者名】

リヨク

【あらすじ】

十二支である龍によって転生させられたと教えてもらった私、博麗霊夢（♂）。
どうやら転生者達のバトルに巻き込まれたようです、叶えたい願い

と言うよりは私欲のためにそのバトルに参加します！

これは十二人の転生者達のバトルである。性転換、キャラ崩壊はありますがチートはありません、それでよろしかったら見てやってください。

博麗に転生？そして始まる物語（前書き）

時空管理局アンチや正義の魔法使いアンチやアンチ貴族じゃないのに敵対関係を目指しました。

と言うより東方ってこの三つから狙われるんですよ、存在とか魔力とか妖魔関係で。

博麗に転生？そして始まる物語

私は転生者だ、と言っても神様には会ったけどチート能力は貰っていない。あくまで神様は純粹な能力での戦いが見たいらしいようだ。それでも才能とか普通に必要なものはくれるらしいけど。

戦いと言うのは転生者同士の戦いらしい、年に一度抽選で戦わせる転生者を選び、色々とごちゃまぜにした世界に飛ばすらしい。

別に殺す必要は無く降伏すればその時点でリタイア、戦う権利を失う。そうになっているらしい、これはあくまで教えてもらった事に過ぎない。既に私は忘れてしまっている。

転生者の数は十二人、十二支と同じ数だ。

転生は原作キャラに憑依した人間が居る場合は記憶を少しずつ消去するらしい。ただし戦わせるらしいのだが。

色々あるが勝利した一人だけがどんな願いでも叶えるが出来るらしい。

「と、言う訳」

「全く分からないんだぜ」

「私も、既に記憶失ってるからね」

私は原作キャラに憑依した人間らしい、性別は生前と同じ男だが……。

「まあ戦いなんだ、私も手伝うぜ!!」

「ありがとうね、魔理沙」

私の名前は博麗霊夢、今でこそこの名前を胸を張って名乗れる。

「じゃあ早速弾幕勝負といこうぜ!!」

「この前のルールのまま?それとも元に戻す?後新ルールがあるんだけど」

「じゃあ新ルールだぜ!!」

「分かったよ」

転生者との戦いがあるらしいけど今はどうでも良い、今はこの大切な時間を……。

「恋符「マスタースパーク」!!」

「霊符「夢想封印」!!!」

守りたい、それだけだ。

「ぜえ……ぜえ……また負けた」

「そりゃあ年季が違うからね」

結局、私の圧倒的な勝利です。やはり男と女の差があるのですから……。

「外見が女みたいな霊夢に負けるって結構悔しいんだぜ」

「少し歯を食いしばりなさい」

「ちょ、ま! !」

「問答無用だ」

——バキヤツ! !

この神社に鈍い音が響きました。

「拳骨なのになんで割れた音があああああああ! ! !」

「黙れ」

——ゴキ

「だ……からなんで……そんなお……」

——ガク

ようやく倒れたようだね。昔から御仕置きしていたから耐性が付いたのかな？それならもつと強いお仕置きにするけど……。止めた方がよさそうね。

「とりあえずこーりんの所でも行きましようか」

やっぱり武器はあったほうがいいからね。何時までもお払い棒と札と針が武器って言うのは悲しいから。これでも男の子だし。

「魔理沙はー、このままにしておく風邪ひきますね、最近肌寒いですし……。まあ毛布くらいはかけておくべきですね」

襖の中にある毛布を魔理沙にかける、少しだけぐずる。

「まったく、大人しくしていたら可愛いのに」

そう言い空を飛ぶ、やっぱり戦いのために特訓はしとくべきなんですよね。

「聞こえてるんだよ……ばか」

「こーりん、居ますか？」

森の中にある家を抜け扉を開けるとそこには！！

古臭い道具に新しい道具と全く一貫していない統一性の無い空間。

「やっぱりごちゃごちゃしていますね」

「自分でもそう思うよ」

私の斜め前で座って話す白い髪青年、彼こそが森近霖之助ことこーりんです。半人半妖で人間に比べればとても長生きです、悩みは

人だけがかかる病気と妖怪だけがかかる病気の両方にかかりやすい自分の体質、能力は『道具の名前と用途が判る程度の能力』と結構便利な能力です。実は天下を取る程度の能力を持つ草薙の剣を持っています。非売品の為買えません、残念です。

「で、出来ましたか？」

「ああ、一応ね」

「楽しみです」

こーりんに五ヶ月くらい前から頼んでいた物がようやく完成したらしい。

「取り合えず先に渡すのはオリハルコンとヒビロカネの短剣十本」
こーりんがこっちに渡してきたものは両刃で刀身が赤色の短剣五本、黒に近い色をした短剣五本。そして十本全ての鞘にそれをつけるベルト。刀身には陰陽文字が書かれています。

「ほお、中々いい仕事していますね」

「まあね、それよりも君に使いこなせるかどうか……」

「剣をやっていた事もあります、特訓だって継続しているから大丈夫です」

「それなら良いんだが……」

そう言って次に渡してくれたものは少しだけ小さい日本刀、脇差で

す。その刀を鞘から抜き刃を見ます、赤が刃と黒が峰の日本刀、切れ味は良さそうです。この刀にも陰陽文字がちゃんと書かれています。

ですがこの刀にはさっきまでの探検と違い圧倒的な力が溢れ出ています。

「ケルト神話に出てくるディルムッド・オディナ、他の呼び名はダイマッド、ディアルムド・ウア・ドウヴネ、ディアミッド・オダイナ等があるフィアナ騎士団の持つ武器の内の一本ベガルタの破片を溶かし混ぜたもの、それがその脇差だ」

こーりんがそう言っています、私はケルト神話に詳しくは無いですがこーりんは詳しいですから。

「本当にそのベガ・ルタの破片を集めるのは大変でしたよ」

偶然拾ったかなりの力がありましたからね、力を込め共鳴させたら辺り一体が光りだしたから……それを全て集めてこーりに渡したらベガルタと言う神話に出てくる剣士の剣だということですから……その帰りにまさかアレを見つけてしまうとは思いませんでしたけど……。

「で、これにはやはり能力が付いてるんですね？」

「そうだね、ベガルタの破片を糸欠片も残さずに集めているからね。やっぱり能力は付くよ」

やっぱり、流石は神話に残るほどの剣……どんな能力が宿っているのか楽しみです。

「『折れない限り持ち主を死なせず折れたら相手を殺す程度の能力だよ』」

「長いしめっちゃ強いですね」

想像以上の強さでした。まさかここまでとは…………。

「ただし最高に硬い金属で強化しているとは言えベガルタは折れやすいんだ、気をつけてくれ」

「つまりこれはヒヒロカネと同じ固さと思わなければいいんですね」

「それだけじゃない、それが折れたら持ち主に瀕死の重症を与えるんだ、滅多に使わない方がいい」

危険すぎる…………こんな魔剣、いまは妖刀だけどこんなもん使えるか……！

「名前は如何するんだい？」

「名前ですか…………」

まあ神話に出てくるような武器ですから…………。私自身は名前に重要性は感じないんですけど…………。こーりんはしつこいですからね。

「そうですね、陰刀にします」

「そうか、ならこれで最後だ」

最後にこーりんが渡して来た物のは長刀だ、それに内包されている力はかなりの物だ。

「ヒヒイロカネとオリハルコンで覆い原型を無くすほど強化したけど……………」

私は刀を鞘から抜きます、そこには白く美しい刀身で何故か黄金に光っている……………そしてそこには陰陽文字と精霊が書いたとされる精霊文字が書かれていた。

「この剣、今は刀ですが……………これがエクスカリバーを原型とした刀」

そう、この前散歩していたら偶然湖に出してしまったんです。そこで水を飲んでいたんです。そして帰ろうとするとなぜか湖から女性が現れました、黄金の剣を持って。

剣は厄介でしたがそれを使っている本人が弱すぎたんで楽に倒せました。その後色々と話してもらったんです、どうやら私がこの剣に相応しいかというものだったようです。

だけどエクスカリバーと言えど疲労が溜まっていたんでしょう、少し壊れそうになりましたから……………。でこーりんにわたして強化して日本刀に変えてもらうことにしたんです。

「で、これの能力は？」

「昔はどうだったか分からないけど今は『進化する程度の能力』だよ」

「やはり変質していますか」

「ああ、元々がカリブルヌスと言う剣だったんだ、それが三回も変われば変質するだろう」

「なるほど」

そう言うのと刀を鞘にしまうと全て持って帰ります。元々お金は先払いでしたから。

「さよなら、こーりん。壊れたらまた来ますね」

「なるべく壊さないようにしてくれよ」

苦笑いしながらこーりんはそう言いました。

「龍よ、お主の駒はどうじゃ」

巨軀なその体は黄色と黒の縞々模様、虎が蒼に近い緑色の鱗を持ち

長い髭を生やしている長い胴体の龍に話しかけていた。龍はゆっくりと後ろを振り向き優しい目で虎を見る。

「駒とは言うな、生きておるのだぞ」

龍はそれに不機嫌な声で答えた。

「いやな、すまん。転生者と言うのも気が引けるのでな………それなら駒ならどうかと思ったんじゃが」

「ふうむ、そこら辺は難しいの」

「まあ彼らのうち一人が生き残ればあらゆる願いを叶える権利が与えられるからの」

「出来る限りだがな」

「そうだな、もしも願いで元の世界に戻りたいと願えば今時間を止めている世界の時間を解凍するんだが……」

「そう言うな、で、オリジナルの物語に出てくる人に憑依したのは何人だ？」

「三人だ、性別が反転しているのも含めてだが……つか私のだが………博麗霊夢、ネギ・スプリングフィールド、平賀才人だ」

「なるほど……で、オリジナルの物語を元に作り出し混ぜ合わせた世界だからのお、混ぜる世界はなんだった？」

龍が不思議そうに言い、虎がそれに答える。

「東方、リリカル、ネギま、ゼロ魔……これが今回のステージだ」

「ただいまー」

ようやく帰ってこれました、妖怪で試したんですけど強すぎですね。

流石は伝説クラス……………。

「お帰り霊夢ー!!」

魔理沙は私のお茶を飲んでいます、しかも美味しいやつです……………。
ですが魔理沙と一緒にお茶を飲んでる緑色の髪をした少女は一体……。

「あ、私は東風谷早苗と言います」

「私は博麗霊夢です、これでもちゃんとした男ですよ」

「ええ!!!?こんなに可愛くて髪の毛も綺麗なのに!!!?」

早苗さんは凄く驚いています、そんなに驚かなくても良いのに……

「だろ？ 霊夢は女顔で童顔なんだぜ」

「魔理沙、お前は後で殺す」

「何でだよ!!」

魔理沙が叫びます、ですが私の心を傷つけたお前だけは許さん、絶対に。

「で、何か用？」

「……この神社を貰い受けます！」

はっ？

博麗に転生？そして始まる物語（後書き）

魔理沙 「次回は「読書の秋？スポーツの秋？紅葉の秋？そんなんじゃない！食欲の秋だ！！」だぜ、お楽しみに！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0778ba/>

東方十二転生 ～ the transmigration chosen as the twelve zodiacal signs -- 1

2012年1月1日21時49分発行